



筑紫女学園大学リポジット

The Education of Korean Race in Chinese Hei Long Jiang Province and Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崔, 淑芬, CUI, shufen メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/424

中国黒龍江省における朝鮮族の教育と日本

崔 淑 芬

The Education of Korean Race in Chinese Hei Long Jiang Province & Japan

Shufen CUI

はじめに

近年、筆者は中国のチベットや新疆・内モンゴル・寧夏回族自治区及び長江南部に位置している少数民族の教育現状の現地調査を行い、それに関する論文を執筆、学会で多数を発表するなどの研究活動に取り組んでいる。昨年の2007年夏に、「密山の朝鮮民族の教育と日本」というテーマで、資料探策および現場の調査を行い、中国の東北地域に赴いた。

密山市は中国黒龍江省の最も東端でロシアとの国境に接する小さな町である。人口45万人あまり、漢民族以外に朝鮮族、満州族、モンゴル族、回族などが住む多民族地域である。歴史や地理的な諸原因によって、発展が遅れた貧困地域であり、真僻地で、しかも中国空軍・戦車学校発祥の地でもある。

1945年8月15日、日本が敗戦したとき、満州、いわゆる中国の東北地区には、戦前の国策により移住していた150万人ともいわれる日本人がいた。翌年の1946年、大部分の人が引き揚げたが、一部分の人は、中国の要請により技術者及び必要人員として、工場・病院・鉄道・軍隊・各種研究機関及び学校などに残って、新しい中国の復興と建設のために働いた。その後、中国の人々と一緒に仕事をする中で、苦楽を共にし、相互に友情と信頼がうまれた。帰国後、彼たちは1977年、「中国帰国者友好会」を創設した。その主な原則は「両国の友好関係を支える基礎は民間交流」。互惠・平等の立場で友好交流を促進するということであり、「日中友好の発展に寄与する」という目的であった。1981年5月、会名を「日中平和友好会」と改めた。

以上のように密山市は九州平和友好会にとっても、非常に堅い絆と深い縁を有する地域である。その地域の未就学児童、通学しているが経済的な理由で学校を休みがちな子供、進学したいが家庭の事情でできない子供などに育成基金を贈って援助しようという育成資金貯金運動が始まった。

2001年7月4日、第一次訪問団の三井哲郎団長ほか6名が密山市教育委員会へ贈呈した。密山市政府や教育機関は、大変意味深くその訪中団員7名に「密山市荣誉市民」の称呼を贈った。それ以来、「日中平和友好会」は毎年、訪問団を派遣している。尚、訪問団の旅費は、全員自費である。

筆者は2007年の夏休みに、その育成基金の贈呈経緯、意義及び密山市に残った遺跡、そして育成基金を受け入れた朝鮮族学校の教育実態を調査するため、九州日中平和友好会第六回密山訪問に参加させていただいた。

本論は、密山市朝鮮族学校教育の沿革、そして民族教育の発展現状と日本の関係を現地で調査した結果により得た、データや諸資料などに基づいて報告するものである。

一、密山市朝鮮族学校教育の沿革

朝鮮族は97%にあたる186万人が東北三省に集中しているほか、内モンゴル自治区に2万人、北京市に1万人などが散在している。朝鮮族が83万人に達する延辺朝鮮族自治州を別格として、各地には朝鮮族鎮あるいは朝鮮族郷があつて一定の自治が認められており、鎮・郷の下位の行政単位である村にも朝鮮族村がある。2006年の密山市人口調査によれば、密山市の総人口は43万7,601人、その中で朝鮮族の人口は2.6万人であり、9つの郷村、17朝鮮村に集中している。

市の東南の蜂蜜山に市名は由来する。満州国時代に“蜜”の字を“密”へ改めて、密山と改称した。朝鮮族の密山市への移住は19世紀六十年代半ば頃から始まった。1861年(咸豊11年)、清朝政府は封禁政策を解除して、朝鮮人の密山移住を許可した。清朝政府は強制的な同化政策を進めたが、移住朝鮮人は「書院」という私塾のような教育機関を設立して子弟教育をおこなった。教育の内容は主に、『朝鮮国文』、『千字文』、『五言』、『絶句』、また、算盤で算数を教えたりしたのである。(注1)

1909年、密山地域で近代教育を推進したのは、朝鮮国内から移住してきた民族主義者たちであった。当時、朝鮮移民団の韓興洞創始人・李承熙が蜂蜜山で韓民学校を設け、愛国教育を始めた。その後、朝鮮族小学校や1913年にできた武官学校、韓興義塾などが相次ぎ現れた。この時期においては、初等教育に重点が置かれていたことがわかる。

1933年以後、密山に移住した朝鮮人は1万1,730人になっている。当時、朝鮮民族教育運動が盛り上がり、民族団体・宗教団体によって小・中学校が次々と設立された。1937年、密山朝鮮小学校が創立、300名余りの生徒が入学した。今の密山朝鮮高校の校長先生の話によると、当時、ほとんどの子供が朝鮮語で育っているが、しかし、漢民族と雑居しているため、漢語の勉強も必要と判断され、漢語は一年生には六時間教えている。六年生になると、漢語で文章が書けるし、会話もできるようになったという。

教育の発展と共に、民族意識の高揚のために朝鮮語・朝鮮地理・歴史・文学等の科目が重視される教育が行われるに至った。有名なのは、愛国宗教者・尹世復の大興学校(のち大棕学院に改称)や朝鮮民会により創設された平陽鎮普通学校、大同学校、広新初級国民学校と太陽村初級学校な

どである。在校生は3,488人になっている。『朝鮮国文』、『四書五経』、算術の他に、朝鮮歴史を主な授業科目として教えた。いわゆる、民族文化・歴史、救国思想を教育の主旨としている。(注2) 1945年後、東北部の朝鮮族の言語や歴史教育が一層重視され、8月に、「龍井学校改編委員会」・「ハルピン北満教育委員会」などがつくられ、小学校の改善・新設や吉林省立龍井中学校・ハルビン韓人中学校が開校していた。(注3)

1949年9月に制定された基本法「共同綱領」のもとで、朝鮮族は民族固有の言語と文化の発展が保障されるとともに、1952年9月、「延辺朝鮮族自治区」が設立され、定住朝鮮人は中国籍の朝鮮族公民として規定された。55年に延辺朝鮮族自治州と改称、58年には長白山県朝鮮族自治県も成立させた。そこでは自治条例が認められ、延辺の州長には朝鮮族が就任することになった。

朝鮮族の教育においては、1952年4月16日に、政務院により「少数民族教育行政機構の設置に関する決定」が公布され、少数民族の教育を管轄する少数民族教育行政機構、あるいは専門人員を置くことと決定したのである。また、「決定」の中では「少数民族地区においては、引き続き小学校教育を普及させる一方、中等教育と職業技術教育を発展させ、人材をより早くより多く養成するために努力すべきである」と民族教育の権利が認められ、朝鮮族学校も多数設置されている。民族語を尊重し、朝鮮族地域では看板や公式的な会議の用語は朝鮮語を主として漢語も併用になっている。1954年～1955年度中・高教育授業時間割表を見てみると、

表1 1954年～1955年度朝鮮中・高教育各教科授業時数表

時数 教科	中学校						高等学校					
	第一学年		第二学年		第三学年		第三学年		第三学年		第三学年	
	前期 18週	後期 18週	前期 18週	後期 18週	前期 18週	後期 17週	前期 18週	後期 18週	前期 18週	後期 18週	前期 18週	後期 18週
	週 授 業 時 数											
朝鮮語	6	6	5	5	4	4	4	4	4	4	3	3
漢語	5	5	5	5	4	4	6	6	6	6	6	6
算数	7	7										
代数			3	3	3	3	3	3	2	2	2	2
幾何			2	2	3	3	2	2	2	2	2	2
三角									2	2	2	2
物理			3	2	2	2	3	3	2	2	4	4
化学					2	3	2	2	2	2	4	4
植物	2	2	3									
動物				3	2	2						
ダーウィニズム基礎							2	2				
衛生常識	1	1	1	1								
中国古代史	3	3	3									
世界古代史				3	3	3						

世界近代史							3	3	3			
中国近代史										4	3	3
自然地理	3	3										
世界地理			2	3	3	2						
中国地理							2					
外国経済地理							2	2	2	2		
中国革命基礎知識					2	2						
社会科学基礎知識							2	2	2	2		
政治知識											2	2
体 育	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
音 楽	1	1	1	1	1	1						
図 画	1	1	1	1	1	1						
製 図							1	1	1	1	1	1
総 時 数	31	31	31	31	32	32	32	32	30	31	31	31

国家教育委員会民族地区教育司『国家民族教育工作文件選編』（1949年～1988年）により作成

表1の漢語授業数については、高等学校三学年は中学校より多く、6時間になっており、それは、高校生の進学あるいは就職に関わっているからである。朝鮮語の使用範囲が漢語に比べて狭いため、進学や就職の面で不利な点がある。朝鮮族学校を卒業した者は、相対的に朝鮮語のレベルが高く、漢語のレベルが低いため、進学後漢語で行われている授業についていけない学生が少なくなかった。こうして漢語の学習は中学校より切実であることが考えられている。一方では、朝鮮語の時数は学年ごとに漸次減っており、高校第三学年において、3時間しかなかった。この原因については、「朝鮮語は表音文字で、漢語より習得しやすく、習得に必要な時間も短い上に、各学科の授業がすべて朝鮮語で行われているため、朝鮮語の時数を減らしても水準の低下を招くことはない」と判断されている。（注4）しかし、十年間の文化大革命期において、「民族溶合」、「朝鮮語無用」論の蔓延によって、民族教育が被った打撃は大きかった。1950年代につくられた民族教育司などの機関と民族教育政策が廃止され、朝鮮族学校では漢民族学校の教育大綱をそのまま使い、小学校一年生から十年間の朝鮮語の授業時数は千時間以上減らされた。こうして朝鮮語喪失の問題が徐々に広がり漢族学校に通う朝鮮族の割合も多かった。（注5）

1984年に、「中華人民共和国民族区域自治法」が実施され、88年に、延辺朝鮮族自治州が「朝鮮語文工作条例」を設定し、「朝鮮族自治州の第一言語は朝鮮語である」と定め、山間地や辺境地の者も含めて朝鮮族の子供が民族学校に入学し、朝鮮語で教育を受けられるよう保障することなどを具体的に決定した。更に、1991年、国家民族事務委員会が「少数民族の言語文字工作进行を強化することに関する報告」の中で「各民族は皆自分の言語を使用し発展させる」と明言し、朝鮮族の言語教育の推進は盛んになった。（注6）

二、朝鮮族の教育現状と日本の関係

密山でも、朝鮮族の教育は一層発展し、85年に朝鮮族の中小学校の生徒数は4,189人に達している。朝鮮族班と漢族班をあわせもつ連合小学校もある。朝鮮語のほか漢語の学習にも力を入れ、質の高い民族教育も行われている。

筆者が、今回の調査地域を密山市にしたきっかけは、九州平和友好会がその地域の未就学児童、通学しているが経済的な理由で学校を休みがちな子供、進学したいが家庭の事情でできない子供たちへの育成基金の贈呈活動を行っていることと直接関わっている。

中国では中学校を初級中学校（初中）、高校を高級中学校（高中）、初中と高中とが併設されている学校を完全中学校（完全中）と呼び、初中までが義務教育にあたる。密山市には朝鮮族の高校が1、職業高校が1、初中が4、高中が2、完全中が1、小学校が19校ある。ここでは、密山市朝鮮高校を取り上げ、その教育の現状の分析を通して、朝鮮族の教育特徴を見てみたいと思う。

1994年設立された密山市朝鮮高校では、朝鮮語や朝鮮歴史の授業は朝鮮語で行われている。また、漢語の外、唯一の外国語は日本語になっている。

表2 高校一年時間割表

曜日	科 目								クラス 会 議
月	文	日本語	物 理	生 物	数 学	歴 史	漢 語	朝鮮語	
	理	物 理	日本語	数 学	生 物	朝鮮語	歴 史	漢 語	
火	文	数 学	化 学	政 治	漢 語	地 理	体 育	朝鮮語	
	理	化 学	数 学	漢 語	政 治	体 育	朝鮮語	地 理	
水	文	朝鮮語	数 学	日本語	歴 史	数 学	電 信	物 理	
	理	数 学	朝鮮語	歴 史	日本語	物 理	数 学	電 信	
木	文	日本語	数 学	漢 語	生 物	政 治	化 学	物 理	
	理	数 学	日本語	生 物	漢 語	化 学	物 理	政 治	
金	文	日本語	地 理	数 学	化 学	漢 語	体 育	自 習	
	理	地 理	日本語	化 学	数 学	体 育	漢 語	自 習	

密山市朝鮮高校提供

表2から見れば、文系と理系に分けられ、いずれにしても、週に朝鮮語の授業は3、漢語は4、日本語は5になっている。筆者は日本語と漢語の授業を見学した。両科目の担任の先生は皆朝鮮人である。話によると、この学校は校長をはじめ、教職員及び生徒は全員朝鮮人で、いわゆる、朝鮮人しか受け入れない。学校では、朝鮮語と漢語両方とも使い、皆中国語が大変流暢である。日本語を外国語として三人の先生が担当しており、中には、二人は日本に留学の経験があるとい

うことである。「なぜ、外国語が英語ではなく、近くにあるロシアの言語でもなく、日本語なのか」と金校長先生に聞くと、「日中友好交流以来、密山はよく日本との交流を行い、特に、九州平和友好会にとっても非常に堅い絆と深い縁を有する地域であるから」と答えて下さった。

前述したように、中国の建設に貢献した日本人が帰国後、「両国の友好関係を支える基礎は民間交流。互惠・平等の立場で友好交流を促進して、日中友好の発展に寄与する」という目的で、1977年、「中国帰国者友好会」を創設した。1981年5月、会名を「日中平和友好会」と改めた。2001年、彼らは、嘗て、中国の空軍の養成に尽力した密山で、経済的な理由により就学困難な子どもたちが学校に通うことができるよう支援する活動（希望工程と呼ばれている）を始めた。

「希望工程（希望プロジェクト）」は、1989年10月30日、中国青少年発展基金会の開始を発表した。「希望工程」は、貧困のため学校に通えない子供たちの支援を目的とした公益事業である。奨学金制度の設立、小学校校舎の新設・修繕、教材や文具の提供などを通じて、貧困地区の教育環境の改善を支援する。多くの国家指導者や共産党幹部も「希望工程」への支持を表明し、鄧小平は“一人の老共産党員”という名義で2度の寄付を行った。



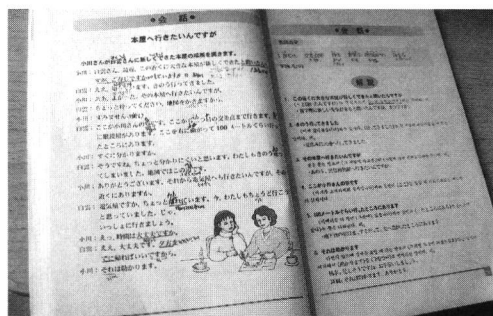
密山朝鮮高校教育棟（於：密山）



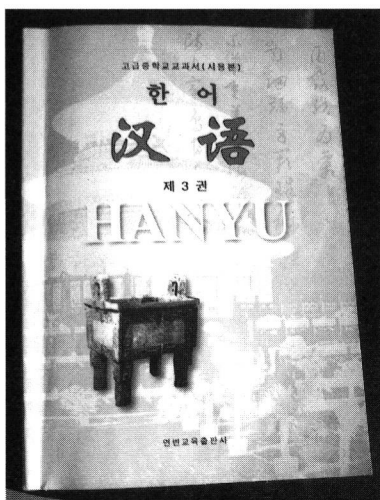
授業風景（於：密山朝鮮高校）



朝鮮語教科書



日本語教科書



漢語教科書



生徒たちと面談(左3人目が教務長) (於:密山朝鮮高校)

2000年5月に、九州平和友好会が、「中国僻地の密山の未就学児童、通学はしているが経済的な理由で学校を休みがちな子供、進学したいが家庭の事情でできない子供などに育成資金を贈って援助

しよう」という「中国未就学児童の育成資金貯金運動」が始まった。具体的には、

会員は空き箱・空き缶・空き瓶などを活用した貯金箱を用意する。

貯金は決して無理をしない。だから不特定多数の人、団体への募金活動は行わない。

例えば、帰宅時のポケットの硬貨(小銭)を貯金箱に貯める。

この貯金は任意であるが、本会の事業の一つとして位置付ける。

目標額10万円として2001年3月31日に締めきるが継続事業とする。

集約した浄財は「育成貯金会計」に入れて独立会計とする。

交付については、中国領事館、九州日中平和友好本部機関と充分検討する。(注7)

と、日中友好の善意から、民間団体として密山への「助学解困微笑工程」、いわゆる「希望工程」に育成資金を送って援助する活動を決めた。2001年7月4日、第一回密山学童育成資金寄贈のため三井会長以下6名が出発した。密山市は三井会長に「密山市荣誉市民称号」を与えた。それ以後、毎年、資金の寄贈を行って続けている。筆者は密山市朝鮮高校の教育現状と日本の繋がりなどを調査するため、2007年第六回の寄贈活動に参加させていただいた。



本の寄贈場面(於:密山朝鮮高校)



資金の寄贈



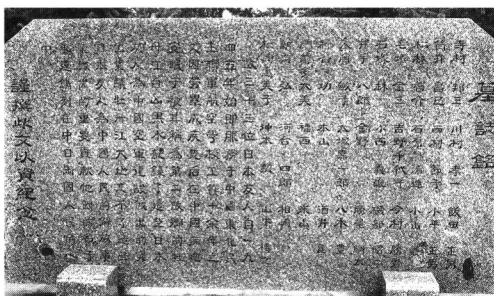
東北老航校記念館（於：密山）



1999年11月30日：東北老航校飛行教官内田元五（左二）訪問廣州時與老航校孟力（左一）華龍毅（左三）合影
老航校の教官内田元五氏（中央）（於：密山東北老航校記念館）



元東北老航校の卒業生への取材（於：北京）



記念碑（於：牡丹江烈士陵園）



空軍服・靴（於：密山東北老航校記念館）



卒業した空軍学生たち（於：密山東北老航校記念館）



故日本人墓（於：牡丹江烈士陵園）

九州日中平和友好会会員のなかに、林弥一郎のような元日本飛行部隊の人間がいれば、内田元五のような陸軍航空士官学校の方もいた。内田元五氏の話によると、1945年8月15日、第二次世界大戦終戦。林弥一郎の飛行部隊の主力がほかの部署から加わった350人ぐらいの人達と共に中国に残り、中国人民航空の創設期に航空技術者の人材育成のために協力した。当時、機務教員になる人も、その大半は経験も浅く技術も十分とはいえなかったが、中国の学生に対しては言葉の壁を突き破るために、片言まじりの中国語を連ね目にものを言わせ、顔の表現、手足、身体全体で意志を伝えようと涙ぐましい努力をし、一方、学生は、党から与えられた航空技術取得という光栄ある重大な任務を果たすべく、直向きに教官の目、顔、動き、手足、身体全体で示す表現を通して、教員が何を言わんとしているのか、教員も学生も、眼を皿のように開いて真剣と真剣が火花を散らしているのである。ようやくそれぞれの意味が通じたときお互いに交わすニンマリとした笑顔、この笑顔の積み重ねが教学間に親しみ、信頼、尊敬の念を生み、特別の感情へと発展していった。

この東北老航校記念館は密山にある。当時残った貴重な写真や実物が展示されている。中には、1999年11月30日、東北老航校飛行教官だった内田元五氏と老航校孟力、華龍毅、また、同行した井上一郎氏が張積慧、孟力、華龍毅たちと一緒に撮った写真も展示されている。

一方では、中国の空軍建設に力を尽くし、中国で亡くなった方も少なくなかった。彼たちを記念するため、牡丹江烈士陵园で墓や石碑がつくられた。

牡丹江烈士陵园は、牡丹江鉄嶺山に位置しており、1989年5月5日に建てられた。中には、烈士記念館には高さ15メートルの革命烈士記念碑及び戦闘服を着た8人の女性が互いに励まし合っているような形をした八女投江記念碑という石像がある。日中戦争時代、この地方でゲリラ戦を行っていた8人の女性戦闘員が日本軍に遭遇し、戦闘が始まったが、弾薬尽き、牡丹江に身を投げて自害した。八女投江記念碑は、その8人の女性戦闘員をたたえて建てられたものである。このような烈士陵园の中には、緑に囲まれている「故日本人友人墓」という記念碑がある。

大理石でつくられた台座に接している記念碑の右側には、「墓誌銘」がある。銘文が刻まれており、年月が経って少し模糊となっている。その内容については、新中国の建設に貢献して亡くなった三十三名の日本人の名前と追悼文が刻まれている。全文を見てみれば、

「墓誌銘

寺村 邦三	川村 孝一	飯田 正男
筒井 昌巳	西村 節子	小平 正男
松林 啓介	石原 清造	小山 巖
毛塚 金三	吉野 千代子	今村 勝男
石塚 林	小西 義雄	磯部 昭二
井手 八郎	金野	勝尾 網太
入角 敏子	大塚 嘉一郎	八木 豊
杉谷 功	本山	酒井 匡

門前 多大美	福田	米山
新海 弘	河合 四郎	相崎
松崎 恵美子	沖本 勲	山下 博之

故三十三位日本友人自一九四五年始即服务于中国东北民主联军航空学校工作十余年之久因劳累成疾先后在中国病逝安眠于被称为第二故乡的牡丹江白水黑山纪录了这些日本友人为中国空军建设做出的突出业绩牡丹江大地忘不了这些日本友人为中国的解放事业做出的重要贡献他们的名字永远镌刻在中日两国人民的心中。

谨撰此文以资纪念」

とある。

銘文の意味については、いわゆる、「亡くなった三十三名の日本人は、1945年から中国東北民主联军航空学校に十数年あまり務め、長年の働きすぎでなくなった。第二故郷と呼ばれている牡丹江に永眠したが、これらの日本人が中国空軍建設に多大な貢献を与え、歴史に刻まれている。牡丹江の人々は彼等の功績を忘れられない。彼等の名前は永遠に中日両国人民の心に残っている。銘文にて謹んで記念する」と刻まれている。

牡丹江市には、「三道烈士陵园」、「爱国自卫战争殉难烈士纪念碑」、「抗日战争暨爱国自卫战争殉难烈士纪念碑」、「ロシア紅軍解放東北記念碑」「鉄嶺河崇英園」など中国人烈士やロシア人烈士を記念するための記念碑が多数あるが、日本人の記念碑があることは実に珍しい。烈士陵园管理所の方に尋ねると、「よく日本人が詣でるため来ているよ」と話してくれた。

今日に至って、この長い年月続いた中日間の交流の成果は、これらの沢山の有志が命をかけた努力の結晶でもある。この「墓誌銘」は、中日の歴史の一ページを検証するものでもある。故に、これらの世を去った人物の事実に光を当てることは重要なテーマとなり得ると思っている。

取材の中で、密山市朝鮮高校の生徒たちと懇談した。中には、「日中平和友好会」の寄付金を受けて通学している生徒もいた。懇談の最中、生徒たちがそれぞれ自分の夢や、「日中平和友好会」に対しての感謝の気持ちを書いて残した一部分が次のコピーである。

非常感谢您这次对我们的资助和关心，使我们能更加放心地追求自己的梦想，我们也不会~~不~~让您失望，我们会更加努力地学习，为自己的理想，也为学校多年来对我们的关心，也为把我们辛苦养大的父母，以及像夏雨一样给予我们帮助的你，我们会抱着远大的理想，在天空中展翅飞翔的，
どうもありがとうございます。

一言

非常感谢您的帮助 我们会更加努力学习
报答社会。—玄丽华

钱不是万能的，可没有钱是万万不能的 现在
中国家庭贫困的读不上大学，在这种情况下
下社会各界好心人（就像您）给予了很大
的帮助，我的家庭也是贫困的，上学学费也是
个大问题，所以我的梦想就是当上一名优秀
的医生、帮助需要帮助的人，成为一个
社会有用的人，我有了钱，也要帮助像我
一样面临经济困难的人 —王美月

我们以优异的成绩来报答社会，报答^{您和}我们的人。
我希望中国的关系会越来越好吧。

金花



您的每一个笑容都打动了我。~~您~~
您对初次见面的我给的爱，一句话是无法形容
的，我只好用实际行动来^{告诉}，我一定会好好学习，
以优异的成绩来证明的，我一定会为理想而
奋斗的，为了爱我的家人和社会上的每一个人而努力。

胡がどうございまして。—李凤花♡

結び

1978年1月23日、中国帰国者友好会の世話人・林弥一郎、事務局長の金丸千尋等が中日友好協会の招きで中国を訪問した。当時の国務院副総理・王震、中日友好協会会長・廖承志が彼等と会見し、「多くの日本人が新中国建設に協力したことに感謝する」と述べ、「中国帰国者友好会」(のちの日中平和友好会)の発足を祝い、「新しい情勢の下で引き続き、日中友好に努力してほしい」と希望を表明したのである。この訪中での話し合いが、密山との民間交流のきっかけになっており、今日においても、日中友好交流の促進、教育への援助などを行っている。この連綿として絶えず、日中交流の絆が両国を結びつけていることを一層強く感じた。

今までの少数民族の教育調査で、少数民族の教育は中国の教育全体の重要な構成部分の一つであり、民族工作の重要な内容の一つであることを強く感じた。今日において、少数民族の教育は顕著な成果を挙げ、少数民族の在学者数と教員数は全国の平均速度を超えて大幅に増加した。少数民族の教育と少数民族地区の教育水準も大きく向上している。各種の学校は大量の少数民族の幹部と専門人材を養成し、新しい世代の少数民族の知識層が形成されている。彼らの絶対多数は、すでに少数民族地区、あるいは全国の現代化建設の中堅となっており、少数民族地区あるいは全国の経済発展と社会の進歩に大きく貢献している。

注

- 1、『密山朝鮮族百年史』p. 5～6 黒龍江民族出版社 2007年
- 2、『朝鮮族簡史』p.192～194 延辺人民出版社 1986年
- 3、朴奎燦『延辺朝鮮族教育史稿』p.81～82 吉林教育出版社 1989年
- 4、中華人民共和国国家教育委員会民族地区教育司『国家民族教育工作文件選編』(1949年～1988年) 内蒙古教育出版社 1991年
- 5、朴奎燦『延辺朝鮮族教育史稿』p.176～177 吉林教育出版社 1989年
- 6、徐基述『黒龍江朝鮮族』p.172～175 龍江朝鮮民族出版社 1988年
- 7、『日中平和友好会創立20周年記念誌』p. 2

(さい しゅくふん：アジア文化学科 教授)